LE-T を行なったが全て陰性であり、SLE は一例も含まれていない。ANF は急性増悪期または急性緩解期に出現する傾向にあったのは興味深い。ANF は細胞が破壊されて露出した核に対する自己抗体であるから、病勢の急激な変動に際して陽性を示すと考えられる。血沈との相関は表に示す如く関連をみなかった。また常時陽性を示す患者も臨床症状に一定の特徴をつかみ得なかった。

5) 血清補体

血清補体は CH₅₀ を用いて 20 名の患者に測定を行なった。CH₅₀ は 34 から 57 にわたり平均 44.2 であった。当院における正常値は 30 から 50、平均 37 であるから、平均的に高値を示すが、ほぼ正常範囲であった。なお症例が少ないため RA の病勢の推移との関連等は今後の問題としたい。

6) Au 抗原

RA における Au 抗原検出頻度は正常に比し高いといわれ、延永らは 11.1% に陽性であったという。われわれは 105 例中 7 例 6.7% に陽性であった。しかし RA における Au 抗原の意義は不明であり、今回も臨床的に差異を認め得なかった。

IV) 総括

以上当院外来患者約 100 名につき 2 年間の経過中の臨床検査の推移を臨床症状と比較検討した。ある一時点をとらえて多数の患者のデータを検討するとともに、同一患者の経過中の変化を検討することも必要である。われわれの調査で得られた結論を連記する。

1. 血沈はある程度病勢を反映するが、長期罹患や全身症状が出現した症例では関節の炎症所見が改善しても高度促進を示す例が多く、予後もよくない。

2. CRP は炎症所見の変化にやや遅れて変動し、血沈と必ずしも平行せず、血沈より関節の炎症状態をよく反映する。

3. RA テストは常時陽性者 82.8%, 常時陰性者 8.1% であった。両者の臨床像には差異を認めなかった。

4. RAHA は病型や病勢と関連性を認めず、W-R 反応とは相関し、40 倍以上を陽性とみなしてよい。

5. 抗核抗体は 40% に出現し、常に陽性者 5.2%, 常に陰性者 60% であった。炎症の急激な変動に際し出現した。

6. Au 抗原は 6.7% に陽性であった。

解 答

九大 喜多 正鎮

活動性を表わすのは赤沈と CRP がある。われわれの調査では赤沈はほぼ病勢と平行するが中程度以上になると関節の活動性と平行しなくなる。赤沈に影響する因子はあまりに多く、活動性を表わすとはいえない。CRP は病勢よりやや遅れて推移する。

大 多 角 骨 単 独 骨 折 の 1 例

北九州市立小倉病院 整形外科

浦 上 陽 一・太 田 正 紀

久良木 孝 晃・岩 村 英 二

Isolated fracture of the greater multangular

By

Y. Urakami, M. Ohta, T. Kyuragi and E. Iwamura

Kitakyushū Municipal Kokura Hospital

Isolated fractures of the greater multangular are rare.

It occur in about 2 or 3 per cent of all fractures of the carpal bones. The fractures mechanism of trauma are almost evenly divided between direct violence to the wrist and hand and falls on the hyperextended hand. We reported that the isolated fracture of

greater was strongly compressed by the first, second metacarpal, small multangular and scaphoideus on radial deviation of the wrist.

手根骨々折の内でも、舟状骨々折以外のものは、比較的まれな損傷とされている。

手根骨単独骨折に於て、有鉤骨、豆状骨に次いで、大多角骨単独骨折は、まれな損傷であり、文献によれば、1964年出内が、本邦に於て、最初の1例報告を行ったとされ、その後、伊藤等3例、星等1例、その他に数例の報告を見るようである。

われわれも、最近、大多角骨単独骨折（大菱形骨ともいうが）の1例を経験したので報告する。

患者：30才，男，トラックの運転士

家族歴・既往歴：特記すべきものなし。

現病歴：トラックの運転中、対向車に気付き、左側に急ハンドルを切ったが、対向車と接触、そのままトラックは、道路左側の歩道に乗り上げた状態で停止した。

この際、両手でハンドルを90°～100°程左側に回転した状態であった。これは、右手関節を強く橈側に背屈し、母指は、外転位となっていた。この時より橈側手根部に強い疼痛を覚えた。右手関節痛にて来院した。

入院時所見：胸部、腹部および右手関節を除いて四肢にも異常なく、一般検査で、心電図、血液、尿、肝機能、腎機能等に著変は認められなかった。

局所々見：右手関節部全体に軽度の腫脹、右手母指CM関節部に、著明な腫脹と圧痛、母指の外転、掌屈および背屈時に同部の疼痛を認める。母指の知覚、循環障害は認められなかった。レ線にて、右大多角骨に

第1図 受傷時の大多角骨

骨折を認め、骨片の転位、Image透視下では、不安定性も認められた（第1図）。

治療：局所の運動痛強く、骨折片の転位、不安定性を認めることから、観血的治療を行った。上腕部神経ブロックにて麻酔、駆血帯を使用し、Bennett frahturの手術に準じて実施した。Kirschner wire (0.7mm) 2本にて内固定をしたが、骨折片の固定性は良好であった（第2図）。術後は、母指外転移にして、3週間のギプス固定を行った。

第2図 大多角骨・術後

術後経過：術後7カ月にて診察を行ったが、中程度の作業に従事して居り、右手母指に軽度の外転制限が認められるが、局所に疼痛もなく、仕事上および日常生活には特別な支障を認めない。

考察：大多角骨々折の発生機転は、直達外力および介達力によるものとの報告を認めるが、本症例では手関節が橈側・背屈位にて、母指を強く外転位に強制されたものである。これは、斉藤等が示摘するように（第3図）、母指外転位での第1、第2中手骨、小大多角骨、舟状骨に狭まれた、介達力による骨折に相当するものと思われる。この2枚のレ線は、受傷起点を示すが、斉藤等の論文によるものであります。

本骨抗の発生率は、本邦では星等33例中の1例、伊藤の41例中3例との報告があり、欧米の場合でも、同様に手根骨々折の2～3%と考えられている。

治療法としては、保存的療法によっても、良好な成績を得たとの報告もあるが、骨折中の転移が大きな場合、永井等は骨釘術を行っている。伊藤等は経過上、

ブレーキ、ハンドルを握
った位置

ブレーキ、ハンドルを最
大に回した位置

(この2図は、斉藤の論文による)

第3図

CM関節の脱臼を来した症例に、大多角骨の摘出も可能だとしている。Cordrey 等は、5例の報告の内で、われわれと同様に Kirschner 鋼線による内固定を行った例を報告している。

結語：比較的にまれな大多角骨（大菱形骨）単独骨折

で疼痛強く、骨折片の不安定性がある症例に、観血的治療を行ったが、経過良好である1例を、若干の文献的考察を加えて報告した。

文 献

- 津下健哉：手の外科の実際，202，南江堂，5版，1974。
Cordrey, L. J. et al.: J. Bone and Joint Surg., 42-A, 1111-1118, 1960.
斉藤：整形外科，24，53，1973。
Boyes, J. H.: Bunnell's Surgery of the Hand, 590, 5th ed, 1970.
永井ほか：整形外科，21，904，1970。
伊藤ほか：整形外科，19，1065，1968。
星ほか：整形外科，22，941，1971。
McClain, E. J. et al.: J. Bone and Joint Surg., 48-A, 1522-1528, 1966.
Siegel, M. W. et al.: J. Bone and Joint Surg., 51-A, 769-722, 1969.

特異な経過をとった大腿骨頸部骨折の1例

佐賀市百武医院

百 武 進

久留米大学整形外科（主任：宮城成圭教授）

日 高 紀 幸

A Case of The Fracture of The Femoral Neck with Interesting Course

By

S. Hyakutake

Hyakutake Orthopedic Hospital, Saga City

N. Hidaka

Department of Orthopedic Surgery, Kurume University
School of Medicine

A 45-year-old female has broken the shaft and intertrochanter of her femur by labour accident, which were treated by a pin and an intramedullary nail, respectively. The intertrochanteric fracture healed with a slight varus deformity, Subcapital fracture of the femoral neck occurred 4 months thereafter, which was thought to be a fatigue fracture and was operated on by a screw and bone peg fixation. The fracture healed completely after one year.